

18	豊田	小原中部小学校	フナマ マサヨ
			氏名 船間 雅代

分科会番号	17	分科会名	過密・過疎、へき地の教育
-------	----	------	--------------

研究題目

小原に愛着と誇りをもち、自分のよさや強みを生かして課題解決する中で、
自己有用感を高め、自己実現をめざす子の育成
— 効果的な設定をふんだんに仕組んだ協働的な授業づくりを通して —

研究要項

1 はじめに

本校は、小原の自然・文化・人のつながりに根ざした小規模校であり、地域の願いを校訓「たくましい子 よく考える子 明るい子」として大切に受け継いできた学校である。豊かな自然環境や、和紙・伝統芸能・観光・農業などの文化的・産業的資源に恵まれ、地域ぐるみの教育が行われている一方で、児童数の減少や人間関係の固定化、学びや経験の場の限定など、小規模校ならではの課題も抱えている。

2 研究内容

（1）主題設定の理由

本校の子どもたちは、ゴールが明確な活動に対しては、粘り強く、まじめに取り組むことができ、行事や係活動などでも、与えられた役割をきちんと果たそうとする姿が見られる。

しかし小規模校であるがゆえに、関わる仲間や大人の顔ぶれが長期間ほとんど変わらない現実があり、その安心感は大きな強みである一方で、「自分はどんな人間なのか」「他者との違いは何か」といった自己理解・他者理解を深める機会が相対的に少なく、オリジナリティへの自覚が育ちににくい側面がある。さらに、自分の考えや方法に自信がもてず、「間違えたくない」「失敗したくない」という思いから、他者に任せたり、従来のやり方にとどまろうとしたりする姿がある。そのため、大きな場や対外的な場では、主体的に行動することにためらいを感じる児童も少なくない。

このように子どもたちは、「まじめさ」「素直さ」「与えられたことに取り組む力」という大きな強みをもつ一方で、「自分で選び、自分で決め、自分なりのやり方で課題を解決していく力」や、「多様な他者と関わりながら、自分のよさや強みを自覚していく力」に少したりなさがあるという課題を抱えている。

そこで、課題解決に向かう方法が複数あることや多面的な振り返りや他者からのコメントを受け取ることで、自分自身の性質に気付けるようにさせたい。また、オンライン交流会などを通して多様な見方・考え方に触れ自分の課題解決に生かせるようにしたい。

これらの経験、体験活動を通して、自らのよさや強みに気付き、自己有用感を高めていける児童の育成を目指したいと思う。

(2) 目指す児童像

小原に愛着と誇りをもち、自分のよさや強みを生かして課題解決する中で、
自己有用感を高め、自己実現をめざす子ども

(3) 研究仮説

- 仮説1 自分自身を多面的に振り返る機会を設定することに加え、仲間や教師、地域の人など多様な他者からコメントをもらう機会を継続的に設定すれば、子どもは自己分析を進め、自分のよさや強みを自覚することができるだろう。
- 仮説2 自己選択・自己決定の場を、低学年では「いろいろなやり方を知る」、中学年では「自分で選ぶ」、高学年では「自分で方法を設定する」といった段階的な発達に応じて数多く設定すれば、子どもは自分にとって最適な解決方法を見つけることができるだろう。
- 仮説3 オンラインや対面で、多様な他者対話する機会を多く設定すれば、子どもは自己理解を深めるとともに、多くの見方・考え方を知り、それらを課題解決に生かすだろう。さらに、子どもは自分の考えを相対化し、多様な視点を取り入れながら、〈自分の納得解〉を更新し、〈学校最適〉〈地域最適〉へと視野を広げていくだろう。

(4) 研究の手だて

＜手だて1 多面的振り返りと相互コメントの充実（仮説1に対応）＞

◇多面的振り返りのしくみづくり

ポートフォリオや学習カード、振り返りシートを活用し、「できたこと」「がんばったこと」「楽しかったこと」「くやしかったこと」などを多面的に振り返る場を設定する。

◇相互コメントの文化づくり

仲間同士で「よさ見つけ」を行う活動や、学習カードへのコメント交換、掲示物への付箋コメントなどを通して、互いのよさやがんばりを言葉にして伝え合う文化を育てる。

◇地域からのメッセージの活用

様々な学習・活動の場面で、地域の方からの感想やメッセージを子どもに返すしくみをつくり、「他社の目に映る自分」を知る機会とする。

＜手だて2 段階的な自己選択・自己決定の場の設定（仮説2に対応）＞

◇低学年：方法の多様性を「知る」場の設定

授業や活動において、教師が複数のやり方を見せたり、仲間のやり方を共有したりすることで、「いろいろなやり方がある」ことを実感させる。

◇中学年：自分で「選ぶ」場の設定

学習の進め方（個人・ペア・グループ）、調べ方（本・インターネット・インタビュー）、表現方法（文章・ポスター・スライド・動画など）を自分で選ぶ活動を増やす。

◇高学年：自分で「設定する」場の設定

課題の設定から情報収集、整理・分析、発表方法の決定までを、子どもたち自身が話し合いながら決めていくプロジェクト型の学習を展開する。

＜手だて3 多様な他者との対話機会の拡充（仮説3に対応）＞

◇子どもの問題意識を高める単元構想

教科・領域や教育活動の特性に応じてテーマ（例：和紙、四季桜、観光、ラリー、小原の未来など）を設定し、子どもの問題意識を高める教材を模索・選定し、協働的な学びを保障する単元を構想する。

◇オンラインと対面を組み合わせた交流

オンライン会議システムを活用して、調べたことや考えたことを小原地区3小学校で共有したり、ゲストティーチャーと対話したりする機会を設けるとともに、可能な範囲で対面での合同学習や発表会も実施する。

＜手だて4 ICTの効果的活用による学び合いの深化（全仮説を横断）＞

◇学習用タブレットや各種アプリケーションを活用し、調べ学習・意見共有・共同編集・発表などを行うことで、時間や場所を越えた学び合いを実現する。

◇小原地区小学校3校間での資料共有や共同編集（共同スライド・共同ノートなど）を通して、「離れていても一緒に学んでいる」という実感をもてるようにする。

◇振り返りや相互コメントにもICTを活用し、写真・動画・音声など多様なメディアで自分の学びを記録・共有できるようにする。

3 具体的実践の見通し（6実践）

ここでは、本年度実施予定の代表的な6つの実践について、そのねらいと学びの姿を示す。

実践1・・・自分のよさや強みを自覚しつつ最適解を見つける子ども

～3年算数「1けたのかけ算」を使って楽しい買い物ゲームを考えようの実践を通して～

本実践では、「ますますクラブの方と楽しく関わる」（資料1）という相手意識を核とし、買い物ゲームづくりを通してかけ算の活用場面を設定する。単なる計算技能の定着ではなく、「相手に楽しんでもらうためにどのように工夫するか」という目的に根差した課題を位置付けることで、学習への必然性をもたせる構想である。

学習の導入では、施設利用者の様子や思いを共有し、「どんなゲームなら楽しんでもらえるか」という問題意識を高める。その上で、買い物の場面を設定し、複数の計算方法（たし算・かけ算）を比較しながら代金の求め方を考える。ここでは、教師が方法を限定するのではなく、児童が自ら選び取れるようにすることを重視する。

展開では、「商品の値段設定」「個数設定」「ルールづくり」という複数の選択場面を設ける。例えば、同じ商品でも値段を変えることで難易度や楽しさが変わること気付いたり、計算しやすさとゲーム性とのバランスを考えたりする姿が期待される。また、仲間と試行しながら改善を重ねる中で、「自分の考えのよさ」や「他者の工夫」を具体的に捉える機会とする。

終末では、実際に施設利用者と交流し、ゲームを行う予定である。そこで得られる反応や感想を振り返りに位置付け、「自分の工夫が相手の喜びにつながった」という実感をもたせる。これにより、自己有用感の高まりとともに、自分の強みへの気付きへとつなげることをねらう。



＜資料1 ますますクラブの交流＞

実践２・・・数理的な見方・考え方を働かせる中で、最適解を形成する子ども ～４年算数「小原中部小学校の校地内にある様々な面積を求めたい」の実践を通して～

本実践は、校地内という身近で具体的な対象を題材に、「実際に測り、考え、確かめる」という一連の活動を通して、面積概念の理解を深めることをねらいとする。単元を中心課題は、「学校の様々な場所の面積を正しく求めたい」というものであり、学びの目的を明確にした問題解決型の構造となっている。

導入では、校舎や運動場などのマップを提示し、「どのくらいの広さがあるか」という問いを共有する。（資料２）その後、実際に測定活動を行い、長さのデータを収集する。この過程において、「どこを測るか」「どうやって測るか」を児童自身が話し合って決定することで、主体的な問題解決を促す。



＜資料２ 小原中部小学校のマップ＞

展開では、得られた数値をもとに面積を求めるが、単純な長方形だけでなく、不規則な形をどのように分割するかが重要な学びとなる。児童は、「長方形に分ける」「三角形に分解する」「まとめて考える」など、多様な方法を試みる。その中で、自分の考えを説明し合い、他者の方法と比較することで、より妥当な解へと更新していく。

終末では、解の妥当性を検証する活動を位置付ける。家庭での再確認や他の場所への適用などを通して、「本当に正しいのか」を問い直す経験を重視する。こうした活動を通して、単なる計算技能にとどまらず、「根拠をもって説明する力」や「最適な方法を選ぶ力」を育てることを目指している。

実践３・・・事象を多面的に捉え、根拠をもって説明しようとする子ども ～４年理科「めぐる水のしくみ」の実践を通して～

本実践では、日常生活の中で児童が抱く素朴な疑問を出発点に、観察・実験・対話を往還させながら、水の循環という科学的概念の形成を目指す。重要なのは、教師が与えた問いではなく、児童自身の「なぜだろう」を学習の核とすることである。

導入では、「息が白く見えるのはなぜか」「水たまりはどこへ行ったのか」など、生活に根差した疑問を引き出す。児童は自分なりの予想を言語化し、互いに交流する。この段階では、正誤を問うのではなく、「どんな考えがあるか」を広げることが重視される。

展開では、観察や実験を通して仮説を検証する。例えば、水の蒸発や凝結の様子を実験で確かめることで、目に見えない現象を具体的に捉える。その後の交流では、「結果から何が言えるか」を問い返し、根拠に基づいて説明する力を育てる。

さらに、学習が進むにつれて、水が空気中と地表の間を循環しているという見方へと結び付ける。ここでは、個々の現象を関連付けて捉える思考が求められるため、図や言葉で表現する活動を重視する。

振り返りでは、「自分の考えがどのように変わったか」に焦点を当てることで、学習の過程そのものを自覚させる。この実践を通して、「多面的に捉え、根拠をもって説明する姿」を育てることを目指す。

実践４・・・課題を自分事として捉え、主体的に課題解決に取り組む中で、地域への理解と愛着を深める児童の育成 ～５年総合「地域と連携した稲作活動」を通して～

本実践は、小原の地域資源である稲作活動を軸に、児童が主体的に課題を設定し、探求的に学ぶ総合的な学習である。活動の中心には、「なぜ稲作を行うのか」「地域の人々はどのように関わっているのか」といった問いを据え、学びを生活や社会とつなげることを重視する。

導入では、もみまきや田植えなどの体験を通して、稲作の関心を高める。(資料３) その過程で、児童は「どうすればよく育つのか」「なぜ作業が必要なのか」といった疑問をもち、個人やグループで追究課題を設定する。



＜資料３ もみまき体験＞

展開では、調べ学習や体験活動を往還しながら、課題解決を進める。図書館資料の活用や地域



＜資料４ 図書館司書による授業＞

の方へのインタビュー、さらには他校とのオンライン交流など、多様な学びの方法を組み合わせることで、視野を広げる。ここでは、児童が自ら方法を選び、情報を取捨選択する経験を重視する。(資料４)

また、稲の生育状況の観察や作業体験を通して、自然や人の働きへの理解を深めるとともに、「自分たちの活動が地域とつながっている」という実感をもたせる。

終末では、学び発表会などを通して成果を発信する予定である。この過程で、自分たちの学びが他者に伝わる経験を通して、自己有用感の向上と学びの意味づけを図る。

実践５・・・最高学年として課題解決する中で、自己有用感を高める子どもの育成 ～６年 生徒指導「下級生とともによりよい学校をつくる」の実践を通して～



＜資料５ 学級会の様子＞

本実践は、最高学年である６年生が学校の課題を自ら見だし、解決に向けた活動を主体的に進めていくプロジェクト型の取り組みである。小規模校の特性を生かし、学年間の関わりを基盤とした実践となっている。(資料５)

導入では、実際の学校生活の様子(例：廊下を走る場面)を提示し、「なぜ起こるのか」「どうすればよいのか」を問いとして共有する。ここで重要なのは、教師主導ではなく、児童自身が課題として認識す

ることである。(資料６)

展開では、グループで原因を分析し、解決策を検討する。例えば、「ルールの伝え方」「意識を高める工夫」「楽しく取り組める仕組み」など、多様な視点からアイデア



＜資料６ 廊下を歩くための工夫＞

を出し合う。その後、「学校のルールと向き合う週間」などの具体的な取り組みとして実行に移す。

実行段階では、掲示物の作成や呼びかけ活動などを通して、下級生に分かりやすく伝える工夫を行う。この過程で、「相手に伝わるとはどういうことか」を実感的に学ぶ。

振り返りでは、活動の結果を全校で共有し、「何が変わったか」「次はどうするか」を考える。このサイクルを繰り返すことで、児童は学校の一員としての自覚を高め、自己有用感を実感していくことをねらう。

実践6・・・自立活動の取り組みにおける自己有用感の高まりと情緒の安定に関する研究 ～特別支援教育：絵本をツールとした人々との関わりを通して～

本実践では、絵本の読み聞かせを媒介として、「読む」「読んでもらう」という双方向の経験を積み重ねながら、児童の情緒の安定と自己有用感の向上を図る。（資料7）特に、対人関係に不安を抱きやすい児童にとって、安心して、関わることのできる学びの環境をつくることを重視している。

導入では、教師や地域ボランティアによる読み聞かせを行い、物語の世界に触れる中で感情を共有する経験を積む。ここでは、「どんな気持ちになったか」を言葉にする活動を通して、自己の感情への気づきを促す。



＜資料7 地域ボランティアによる読み聞かせ＞

展開では、児童自身が読み手となる活動を位置付ける。どの絵本を、誰に、どのように読むかを自ら決め、練習と振り返りを繰り返しながら本番に臨む。この中で、動画撮影などを活用し、自分の姿を客観的に見つめる機会を設ける。（資料8）



＜資料8 読み聞かせの練習の様子＞

また、読み聞かせ後には、聞き手からの感想やコメントを記録として残す。これにより、「自分の行動が誰かの役に立った」という実感を可視化し、自己有用感の積み重ねにつなげる。

継続的な活動を通して、児童は他者との関わりに安心感をもち、自分自身を肯定的に捉えられるようになることを目指す。絵本という媒介を通して、人と人をつなぐ学びを実現する実践である。

継続的な活動を通して、児童は他者との関わりに安心感をもち、自分自身を肯定的に捉えられるようになることを目指す。絵本という媒介を通して、人と人をつなぐ学びを実現する実践である。

4 おわりに（中間段階として）

本校の研究は、子どもが「自分のよさや強みを生かして課題解決に向かう過程」を重視している。そのために、振り返り・自己選択・対話という3つの視点から授業づくりを進めている段階である。

8月時点では、各実践がまだ途上にあり、成果や課題を総括する段階には至っていない。しかし、いずれの実践においても、子どもが【自分で選び】、【他者に関わり】、【自分なりの納得解から最適解を求めていく】学びの姿を引き出すことを目指している。

今後は、これらの実践を積み重ねる中で、子どもがどのように自己理解を深め、最適解を見いだしていくのかを丁寧に見取り、検証を進めていく。